

京都大学

生態学研究センター・ニュース No. 62

京都大学生態学研究センター Center for Ecological Research,
〒520-2113 滋賀県大津市 Kyoto University
上田上平野町字大塚509-3 Kamitanakami Hiranochō,
Tel: (077)549-8200 (代表) Otsu, Shiga, 520-2113, Japan
Fax: (077)549-8201
センター長 和田英太郎 Home page: <http://ecology.kyoto-u.ac.jp>

—目次—

教官公募のお知らせ..... 1	DIVERSITASシンポジウムのお知らせ..... 4
共同利用委員会からのお知らせ..... 3	センターを去るにあたって Serguei Kiyashko..... 4
京都分室の瀬田キャンパスへの 移転に関するお知らせ..... 3	編集後記..... 5
	今後のスケジュール..... 6

教官公募のお知らせ

当センターでは、下記の要領で教官を募集いたします。つきましては、貴機関の関係者に周知を賜り、適任者の応募・推薦について御高配下さるよう、お願い申し上げます。

1. 採用人員 教授 1名
助教授 1名

2. 対象分野 生態科学一般

3. 希望する内容

当センターは、1991年4月に設置された10年時限(2001年3月まで)の全国共同利用施設で、時限以降さらに、10年時限の新センターの設置を計画している。その基本構想は後に記してあるが、その4つの中心プロジェクトのいずれかに主に参加して、研究を推進していく人材を求めている。また、当センターにおける研究指導・教育の推進や運営への貢献も期待する。年齢・国籍は問わない。

4. 着任予定

2000年4月1日以後のできるだけ早い時期。

5. 提出書類

自薦・他薦にかかわらず、以下の書類を提出してください。

- (1) センター長宛の応募文(希望する職を(a)教授(b)助教授(c)教授もしくは助教授のうちから選んで明記してください)
- (2) 履歴書1部
- (3) 研究業績目録1部(主要著作5編に印を付して下さい)
- (4) 主要著作(上記)の別刷等各1部(これらに関する解説、総説等があれば添付すること)
- (5) 候補者のこれまで行なってきた研究の概要(1000字程度)
- (6) これまで代表者・分担者として参加した研究プロジェクトの概要(テーマ、プロジェクト全体としての主要成果、プロジェクト全体への応募者自身の寄与についてできるだけ簡潔にまとめること)
- (7) センターに来られた場合に、次期センターの4つの中心プロジェクトのうち、主にどれに参加するかを表明し、どのようにそのプロジェクトを展開していくかの研究構想を書いてください(2000字程度にまとめる)
- (8) 応募者の研究内容について問い合わせることのできる人物2名の氏名と連絡先

6. 公募締切
2000年1月21日(金)午後5時までに必着
7. 書類送付先
〒520-2113 大津市上田上平野町字大塚509-3
京都大学生態学研究センター長 和田英太郎
封筒の表に「教官応募書類」と朱書き、簡易書留によって郵送のこと。
8. 問合せ先
(1) 研究内容等について
生態学研究センター長 和田英太郎
Fax: 077-549-8211
ホームページアドレス:
<http://ecology.kyoto-u.ac.jp/indexj.html>
(2) 提出書類について
生態学研究センター総務掛
Tel: 077-549-8200
Fax: 077-549-8201
9. 生態学研究センターの専任教員(1999年12月8日現在)
教授:
和田英太郎、安部琢哉、東正彦、中西正己、浅野透、山村則男、清水勇、川端善一郎、大串隆之
助教授:
遊磨正秀、湯本貴和、占部城太郎、杉本敦子、中野繁、田端英雄(2000年3月に退官)
助手:
成田哲也、藤田昇
10. 新センターの構想

目的: 生物多様性および生態系の機能解明と保全理論

全国共同利用施設京都大学生態学研究センターは2000年度で時限となるが、同名で10年時限の新センターを設立することを計画している。

近年、自然生態系への人為的攪乱が地球規模で起き、今後も持続的に進行していくことは避けがたい。その結果、生命史上いまだかつてなかった速度で多くの生物種が絶滅し、生物多様性が急速に失われつつある。また、エネルギーの流れと物質循環に異常が生じ、自然のバランスが壊れて本来の生態系の機能が劣化しつつある。このような問題を解決するため、その基礎研究をおこなう生態学への社会的要請は大きい。本研究センターの目的は、生物多様性の創出・維持・喪失のメカニズムや、物質循環を基本とする生態系の構造を解明すること、さらに、人為的攪乱の影響を分析し、生物多様性と生態系を保全するための一般理論を構築することである。このような研究は、生物多様性を保全する意義そのものを明確

にし、人類の活動と自然生態系の調和をはかりながら、持続的な人間と自然の共生を達成するために不可欠なものである。以上の目的を達成するため、国内だけでなくアジア・西太平洋地域で以下のプロジェクトを中心に研究を展開する。

中心プロジェクト

- (a) 生物間相互作用が生み出す生物多様性: その機構・機能・保全
(捕食、被食防衛、競争、相利共生、進化的アプローチ、ボトムアップ効果、資源動態、栄養段階動態、間接効果、食物網)
- (b) 水域生態系の構造と機能およびその保全
(多様性、栄養塩、光、水温躍層、遺伝子伝播、プランクトン群集、水生生物、琵琶湖、実験池、アクアトロン)
- (c) 熱帯林における生物多様性と生態系機能
(熱帯林、東南アジア、生物多様性、生態系機能、攪乱、一斉開花、共生、バイオリサイクル、ターマイトロン、安定同位体)
- (d) 分子解析生態学
(遺伝子分析、安定同位体分析、環境適応、遺伝子発現調節、環境ストレス、視覚適応、視物質遺伝子、時計遺伝子、代謝変動、ズ・トロン)

新センターの特色

新研究センターでは、従来の野外研究を中心とする生態学的手法に加えて次のような特色を出そうとするものである。まず、京都大学で設立をめざしているフィールドステーションおよび、大学共同研究機関(国立研究所)として設立が具体化しつつある総合地球環境学研究所などと連携して、野外操作実験を有効かつ迅速に行えるような研究体制を作る。一方、分子生物学・微量化学物質測定などの最新技術を駆使して、因果関係を確実に実証できる実験研究体制を作る。このため、シンパイオトロン施設を充実する。すなわち、野外で検出したパターンを理論化し記述モデルをつくって、それを実験で検証する。さらに、予測モデルをつくり、それを野外で検証するという、従来の生態学で不十分であった科学的プロセスを確立する。

また、研究機関ネットワークを強化して、国内外の人材の交流も含めて研究交流がスムーズにいく体制を作る。質の高い研究成果をあげること、および、社会的貢献をすることが、研究センターに課せられる最も重要な使命であるが、京都大学の理学研究科、および、構想中の地球環境学研究科に協力講座として参加し、大学院生の教育を強化し後継者の養成にも力を注ぐ。

共同利用委員会からのお知らせ

2000年度（平成12年度）京都大学 生態学研究センター共同利用事業公募要項

京大大学生態学研究センターでは、2000年度の共同利用事業の一部として以下の内容のものを公募します。

1. 公募事項

- (1) 研究会：生態学およびその関連分野での重要な研究課題について、研究結果のまとめ・現状分析・将来の研究計画の作成などを行い、当センターの共同研究の推進に役立つ研究会を募集します。
- (2) 集中講義 & セミナーおよび野外実習：学部学生・大学院生を受講対象とし、全国に公開されるもので、生態学およびその関連分野において重要だが教育の場に限られる課題についての集中講義 & セミナーおよび野外実習の企画を募集します。

2. 開催期日

2000年4月10日から2001年3月20日までの期間に開かれるものとします。

3. 採択件数

予算は未定ですが、研究会約5件、集中講義 & セミナー・野外実習約3件の開催を予定しています。

4. 応募資格

大学その他の研究機関に所属する研究者、またはこれと同等の研究能力を有すると認められる方とします。なお上記のうち研究会は複数の研究機関からの参加があることが条件となります。

5. 申請方法

研究会、集中講義 & セミナーおよび野外実習のそれぞれについて、所定の様式による申込書を

所属機関（部局）の長を通じて提出して下さい。申込書は、ファックス又ははがきに、所属機関名・住所・氏名・電話番号を記入し、下記の申込書送付先に請求して下さい。

6. 申込期限：2000年2月29日（火）必着とします。

7. 申込書送付先

〒520-2113 大津市上田上平野町字大塚509-3
京大大学生態学研究センター 研究協力掛
TEL(077)549-8200（代表） FAX(077)549-8201
（封筒の表に「共同利用事業申込書在中」と朱書きして下さい。）

8. 選考

当センターにおいて2000年3月中旬に行います。

9. 所要経費

研究会の出席者、集中講義 & セミナーの講師の旅費、場合によってはその他必要経費の全部または一部を、当センターにおいて支出します。研究会1件について20万円以内を予定しています。

10. 報告書および論文の提出

- (1) 共同利用事業終了後、1ヶ月以内に報告書を当センターに提出して下さい。なお、提出された報告書は、その全部または一部を当センターのニュースに掲載する予定です。
- (2) 共同利用事業によって得た成果を論文等として発表した場合は、別刷り5部を当センターに提出して下さい。

この公募について、御不明な点がございましたら、当センター研究協力掛に御照会下さい。

京都分室の瀬田キャンパスへの移転に関するお知らせ

第2期新営建物の完成に伴い、京都分室が2000年1月下旬から2月上旬にかけて瀬田キャンパスに引っ越し、センターの統合が実現します。温室、鉢棚、水槽等一部施設は瀬田に完成するまで理学部植物園に残りますが、人員は全員が2月上旬にまとめて引っ越し、2月10日には完了の予定です。それ以後は電話・郵便等の連絡は瀬田キャンパスをお願いします。

DIVERSITASシンポジウムのお知らせ

日本学術会議DIVERSITASシンポジウム「生物多様性科学の現状と展望」

11月に予定されていたシンポジウムは、以下のような予定に変更になりました。

日時：2000年3月3日（金）

場所：日本学術会議大会議室

プログラム：

10：00 - 10：20

開会にあたって：戸塚績（DIVERSITAS小委員会委員長）

あいさつ：水野理（環境庁地球環境調査室）

1．生物多様性研究：世界の動向とDIVERSITAS

基調報告：10：20 - 11：00

川那部浩哉（琵琶湖博物館）：環境サミット以降の動向DIVERSITAS

コメンテータ：11：00 - 11：10

浅野透（京都大学）

2．生物多様性と生命科学

基調報告：11：10 - 11：50

星元紀（東京工業大学）：生命科学の発展と生物多様性

コメンテータ：11：50 - 12：00

岩槻邦男（立教大学）

コメンテータ：12：00 - 12：10

志村純子（理化学研究所）

3．生物多様性と環境科学

基調報告：13：00 - 13：40

椿宣高（環境庁環境研究所）：地球環境問題としての生物多様性

コメンテータ：13：40 - 13：50

鷺谷いづみ（筑波大学）

4．生物多様性と持続可能な社会

基調報告：13：50 - 14：30

大賀圭治（東京大学）：持続可能な農業と生物多様性

コメンテータ：14：30 - 14：40

久馬一剛（滋賀県立大学）

5．生物多様性の保全政策

基調報告：15：00 - 15：40

石弘之（東京大学）：生物多様性の保全政策

コメンテータ：15：40 - 15：50

花井正光（文化庁）

6．総合討論：16：00 - 16：30

司会 戸塚績、戸田正憲（北海道大学）

問い合わせ先：

北海道大学低温科学研究所

戸田正憲

Tel：011-706-6887

センターを去るにあたって

Stable Isotope Ecology : one year experience at the Lake Biwa

Serguei Kiyashko

Last year I was appointed in the Center for Ecological Research, Kyoto University, as a visiting scientist. I have arrived at the old CER campus in Sakamoto, Otsu in August 17, 1998 and finished my stay one year later in the excellent new building in Seta. It was my first visit to Japan, and when I came to Sakamoto, I was deeply impressed by beauty of Lake Biwa and its shores, as well as cordiality of my Japanese colleague. It is the first bright impression, that inspired me whole year in my attempts to make modest contribution to the knowledge of processes in the Lake Biwa ecosystem.

I was educated as palaeontologist, but last two decades I was involved in study of modern aquatic ecosystems by means of biogeochemical approach, based on survey of natural distribution of stable isotopes of carbon, nitrogen, and sulfur in hydrobionts. Working many years in the Institute of Marine Biology in Vladivostok (Far East of Russia), I deal mainly with near-shore marine ecosystems in the Sea of

Japan. Benthic detrital food webs, and especially food relations between invertebrates are of main interest in my studies.

Since mid 70-th marine stable isotope ecology: study of food webs and organic matter flows by stable isotope ratios, is developing very fast, but progress in application of stable isotope approach to freshwater ecosystems can be seen during only last several years. Now stable isotope data obtained in some lacustrine ecosystems, including pelagic ecosystems of Lake Baikal and Lake Biwa, are very promising. Some years ago I also took part in the work of international team of scientists from Russia, Japan, USA, and France at the Lake Baikal.

I can say, that I was really happy received invitation from Prof. Eitaro Wada, whose classical works in isotope ecology are well known around the World, to be appointed as a visiting scientist at the CER and to continue stable isotope studies of freshwater ecosystems. It was a good opportunity to communicate with many scientist and students involved in diverse

今後のスケジュール

センターの行事

2000年

2月20日 センター・ニュースNo. 63

3月 センター・ニュースNo. 64 (業績集)

4月20日 センター・ニュースNo. 65

6月20日 センター・ニュースNo. 66

8月20日 センター・ニュースNo. 67

センターあるいは京大環境フォーラム、DIWPA関連の研究会

3月3日 日本学術会議DIVERSITASシンポジウム「生物多様性科学の現状と展望」(東京)

3月8日～31日 第5回西太平洋アジア国際野外生物学コース「オーストラリアの昆虫と熱帯林」(オーストラリア)

関連分野の研究会・シンポジウム

1月24日～25日 未来開拓報告会(京都・芝蘭会館)

2月19日～20日 IGBP-MESSC報告会

2月24日～25日 魚類の多様性に関する国際シンポジウム - 生物多様性理解の新しい地平に向けて(国立科学博物館)

3月23日～26日 日本生態学会(広島大学)